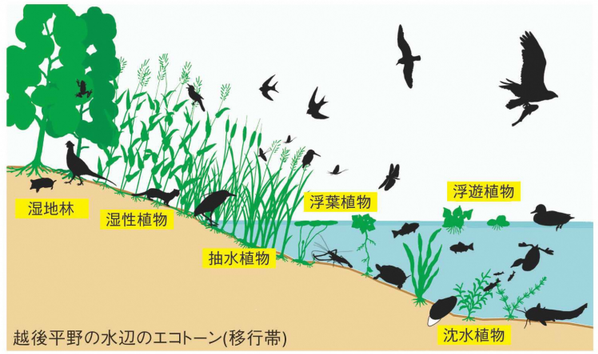
里潟（さとかた）

古くから、潟の環境は、人が潟の恵みを享受することで守られてきました
人と自然が相互に関わり合える「里潟」の価値と魅力を未来にも伝えよう

多様な生き物たちが生育・生息する「潟」



越後平野の水辺のエコトーン(移行帯)

作図:井上信夫

潟には陸域や水域だけでなく、その境界となる移行帯があり、例えば、水上に茎と葉を伸ばす抽水（ちゅうすい）植物、葉を水面に浮かべる浮葉（ふよう）植物、全体が水中にあり、水底に根を張る沈水（ちんすい）植物などが生育しています。

抽水植物群落は野鳥のすみかや営巣場所として、また、浮葉・沈水植物群落は、野鳥だけでなく魚類や両生類、昆虫類のすみか、えさ場となります。

多様な植物がすみ分けているこの空間は、多くの生き物たちが生育・生息している重要な場所なのです。

コハクチョウ

オニバス

アサザ

ギンブナ

潟の環境と人の営みとの関係

昭和の中頃まで、潟端に住む人々にとって、フナ、ドジョウ、ナマズ、コイなどの魚、カモなどの鳥、ハスやヒシなどの植物は、重要な食糧源でした。

また、植物の中でも、ヨシは屋根草や壁の下地、ヨシズの材料として利用されていました。人々がヨシを刈り取っていたことは、ヨシが吸収した水質汚濁の原因物質を潟の外へ排出することになり、潟の水質浄化に大きな役割を果たしていました。

潟底の土は、多量の有機質を含み、肥料効果が高く、稲作をする上での肥料や苗床として利用されました。低湿地の干拓土やアゼ作りにも重宝したそうです。この潟底の土をかき揚げる「ドロ揚げ」は、潟が浅くなることを防ぎ、湿性遷移※を止めることにつながりました。

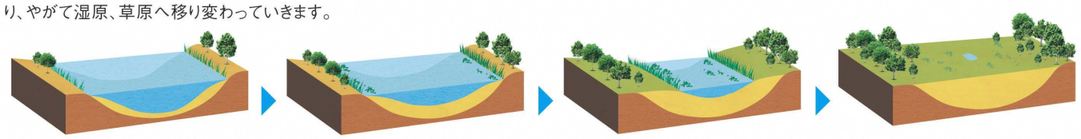
現在、生活様式や産業構造の変化に伴い、潟に対する人々の直接的な関わりは減ってきていますが、福島潟のヨシ焼きやヒシもぎ、佐潟の潟普請やヨシ刈りなど、潟環境の保全につながる活動をしている人たちもいます。

昔のヨシ刈りの様子　北区郷土博物館所蔵

※湿性遷移（しっせいせんい）とは

ある場所に生育・生息する生物種集団が、自然に移り変わっていく現象を「遷移（せんい）」といいますが、下図のように、潟や湖など水のある場所から始まる遷移を「湿性遷移（しっせいせんい）」といいます。

潟のような広い水辺空間は、風や川によって運ばれてくる土砂、潟の中にある動植物の遺骸（いがい）などが潟の底に堆積していくと、水深が浅くなり、やがて湿原、草原へ移り変わっていきます。



水辺の湿性林とヨシ群落がある程度で抽水植物もほとんど見られません。

堆積が進んで、抽水植物、浮葉植物、沈水植物などが進出するようになります。

水深が浅くなり、陸化がかなり進行します。植物相がもっとも多様な段階です。

陸化がさらに進行し、最終的には草原になります。

多田多恵子・田中肇(2010)「大自然のふしぎ 増補改訂 植物の生態図鑑（学習研究社）」より引用・改変

潟に関する情報や歴史を知ることができる関連施設

北区郷土博物館	新潟市北区嘉山3452	TEL:025-386-1081
水の駅「ビュー福島潟」	新潟市北区前新田乙493	TEL:025-387-1491
みなとぴあ（新潟市歴史博物館）	新潟市中央区柳島町2-10	TEL:025-225-6111
江南区郷土資料館	新潟市江南区茅野山3-1-14	TEL:025-383-1001
佐潟水鳥・湿地センター	新潟市西区赤塚5404-1	TEL:025-264-3050
潟東歴史民俗資料館	新潟市西蒲区三方92	TEL:0256-86-3444
白鳥の里（白鳥資料館）	阿賀野市水原314-17	TEL:0250-62-2690（公園管理事務所）

越後平野における新たな地域学 みんなの潟学

新潟を象徴する“潟”を読み解く本として、地形、歴史、文化、民俗、動植物、利水など多様な視点からふるさとの潟の姿を明らかにした本、「みんなの潟学」を出版しました。

・A５版、144頁
・新潟市内の図書館で閲覧や貸出が可能です。

N

潟MAP PLUS（かたマッププラス）

新潟市の潟（湖沼）＋瓢湖

—このマップとともに、新たな「潟」の魅力を見つけてみませんか—

※表紙に掲載の図は、各潟の形を表現するためのものであり、実際の大きさの比率とは異なります。

発行:新潟市環境政策課　Tel.025-226-1359　令和3年3月